

中国帰国者事情・中国文化事情あれこれ

—介護・福祉サービスに携わる皆さまへ—



中国帰国者支援・交流センター
平成 29 年 8 月版

「中国帰国者」—日本に永住帰国した「中国残留孤児・残留婦人」と呼ばれる人々のうち、「孤児」世代の平均年齢はすでに 71 歳を超えました。彼らは、中国語を母語とし日本語という「外国語」の言葉の壁に苦しんできた人々です。全国各地の介護・福祉サービスの現場では、近い将来、本格的に、この「帰国者」への新たな対応を迫られる時代がやってきます。

このパンフレットでは、介護・福祉に携わる皆さまに、この「帰国者」とはどういう人々なのかを知っていただくための情報をお届けしたいと考えました。しかし、「中国帰国者」事情も、「中国文化」事情も、なかなか一口にくくれるものではありません。そこで、私たちが持っている情報や、これまで帰国者の介護に関わってきた方々によるお話の中から、「こういう帰国者がいる、帰国者にはこんな人が多い、こんなことが介護の現場であった」というような“つぶやき”をそのまま拾い上げ、書き留めてみたのがこの小冊子です。この“つぶやき”の1つでも、皆さまの日々のお仕事につながるものがあれば幸いです。

1. 中国帰国者事情	…………… 1 頁
◇ 介護・福祉サービスに携わる皆さまへ（ご案内）	…………… 3 頁
2. 中国文化事情	
(1) 「食」について	…………… 4 頁
(2) 「衣」について	…………… 5 頁
(3) 入浴について	…………… 5 頁
(4) 年中行事について	…………… 6 頁
3. 中国帰国者の／中国文化出身者の「介護」観	…………… 7 頁

1. 中国帰国者事情

- ◆ 「中国帰国者」といっても、終戦時幼かった「中国残留孤児」と、日本語を母語として成長しすでに日本文化を身につけていた「残留婦人」では、事情がずいぶん異なる。
- ◆ 日本人である「孤児」・「婦人」と、一緒に“帰国”した中国人である妻や夫、子どもたちといった帰国者の家族も、“帰国”への思いや「日本」への帰属感は当然異なる。

- ◆ 「残留婦人」は日本語での意思疎通に問題のない人が多いが、日本語での「読み書き」は苦手で、介護保険サービスについて書かれたパンフレットや自治体から来るお知らせなどから必要な情報を読み取ることができないという人も少なからずいる。
- ◆ 終戦時まだ幼かった「残留孤児」は、孤児として中国人養父母に育てられ中国社会で成人となり結婚し子どもをもうけた人々である。日本語を覚えている、日本語が残っている、という人はほとんどいないと言ってよい。日本に帰国して、日本語をいわば“外国語”として、生活の中で少しずつ学んでいった人々である。(せつかく身につけた実用日本語も、高齢になるとともに“はがれ落ち”、中国語だけになってしまう人も多い)。
- ◆ 早期(1980年代)に日本に永住帰国した「孤児」でも、帰国したときの年齢はすでに40代となっていた。50代で、60代で、帰国した人もたくさんいる。70代になって、つまり戦後70年近くになろうとしている今でも、永住帰国を決意して家族とともに祖国日本に帰ってくる人がいる。
- ◆ 帰国者本人は、自分は日本人なのに周囲はそれを認めてくれないと感じている。そして、日本人なのに日本語が話せないことの悔しさと悲しみを訴える。日本人でありながら、中国語が母語であり中国文化を背景として持っているという複雑な存在としての「中国帰国者」を理解してほしいと彼らは願っている。
- ◆ 言葉がわからないから自分には説明してもらえない、言葉がわからないから大事な情報を聞き漏らしているかもしれない、受けられるはずのサービスが提供されていないのではないかと、自分は公平に扱われているのだろうか等々、こうした思いを抱えている帰国者は少なくない。
- ◆ 中国語のできるスタッフがいない施設では、単純な要求も伝えることができず諦めてしまう帰国者が多い。使える日本語があってもその場でとっさには出てこないのだと彼らは訴える。これが重なって施設の利用をやめてしまう帰国者は多い。
- ◆ 中国語のできるスタッフのいないデイサービス施設でも、喜んで通っている帰国者がいる。歩行が困難で外出ができなくなってからは、老夫婦だけでほとんど“引きこもり”のような生活を送っていた。デイサービスに行くことで外に出られる、外の空気に触れられる。施設に通うことは人と接することであり社会に出ることでもある。それだけで気分転換になる(妻も夫の介護から解放される)。言葉はわからなくても、スタッフが気遣ってくれるのはわかる。スタッフが明るく親切なこともわかる。野菜や花を育てる活動が気に入ったこの帰国者は、生き生きとデイサービスに通っている。
- ◆ 施設も利用者の不満に気づかないことはある。通訳を介して帰国者の要望や不満を初めて知った施設側がすぐに対応してくれた。帰国者は、「いろいろなトラブルがあったけれど、日本の施設は利用者の要望に応じて改善してくれる、帰国者を差別しないのだ」と、

ケアマネや施設への信頼が増したということがあった。

- ◆ 帰国者はこれまで異言語・異文化の地である日本社会で常に緊張を強いられて生きてきた。高齢になった今、また新たに慣れぬ環境に飛び込んでいくには大きな決意が要ることだろう。通訳だけではなく、家族もともに“お試し”を体験することで、デイケア施設利用にこぎつけることができたという例があった。(施設で提供される昼食の日本料理に、本人は全く箸を付けようとしなかったが、付き添った配偶者がまず食べてみて勧めると、その気になって食べられたとのこと。)歩行が困難だったこの帰国者は、もともとリハビリに意欲的だったこともあり、施設に通い続け1人で散歩できるまでに改善したという。
- ◆ 中高年を過ぎて永住帰国し日本での生活を零から築いていった帰国者一世世代の場合、電気やガスの使い方から、洗剤の使い方、残り湯の利用法まで、「節約」の精神が徹底している。従って、訪問介護の場合にはこの「節約」の工夫に留意している。これは、帰国者担当の経験が豊かなホームヘルパーから聞いた話である。
- ◆ 帰国者の中には、中国で就学の機会を得られず、中国語での読み書きが不自由な「非識字者」が少なからずいる。中国語に翻訳された説明文があっても“読めない”人がいる。非識字者を傷つけることがないように、家族や、中国帰国者支援・相談員等に、利用者本人は識字に問題がないかを尋ねておく必要がある。

◇介護・福祉サービスに携わる皆さまへ（ご案内）

- ・ 介護サービスに携わる若い人は、「残留孤児」、「残留婦人」とはどのような人々なのか知らない人がほとんどなのではないでしょうか。「中国帰国者」がたどってきた歴史については、以下のサイトをご覧ください。→ [中国帰国者定着促進センター ホームページ http://www.sien-center.or.jp](http://www.sien-center.or.jp)
→ [トップページ](#) → [コンテンツガイド](#) C) [支援情報](#) → [4\) 介護研修情報](#) → * [帰国者とは](#)
- ・ 帰国者一世世代に言葉の壁は厚く、一世世代を支える二世世代も日本語力が十分ではないことが多いのです。そこで、言葉の問題から介護サービスの利用を諦めがちな帰国者を助けるために、国は、帰国者事情に通じた通訳を派遣する制度を設けました。認定調査の申請、認定調査、ケアプランの作成、施設の見学や“お試し”体験、サービスの利用が始まってからのケアマネによる家庭訪問等々の大事な局面では、ぜひこの通訳派遣制度をご活用ください。
→ [中国帰国者 支援・相談員、自立支援通訳等](#) 派遣制度については別紙リーフレットをご覧ください。(上記センターHPの「4) 介護研修情報」コーナーにも掲載しています。)

2. 中国文化事情

(1) 「食」について

- ◆ 施設で供される食事が口に合わないという帰国者の話はよく聞くところである。

帰国者本人は血統は日本人であっても中国文化の中で育っており、配偶者はもちろん中国の人である。中国文化出身者の「食」へのこだわりは人一倍強く、長年なじんだ味の好みは簡単に変えられるものではない。(日本文化を知っている「残留婦人」の場合も、中華の味付けが「なじんだ味」になっていることが多いと聞く。)

こうした事情から、訪問介護の生活援助も、調理だけはホームヘルパーには任せられない、やむなく調理を依頼する場合も、最後の味付けだけは自分がやりたいという帰国者が多いようである。

ヘルパーさんに中華料理を教えて覚えてもらうようにしている、そのため、ジェスチャーや筆談で料理を“教える”ことがうまくなったと言っていた帰国者がいた。
- ◆ 高齢帰国者は一般に食材を“生”で食べることは体に悪いと思っている。特に、刺身など魚を生で食べる習慣は彼らにはない。生水はもちろんだが、南方出身者は生野菜のサラダも食べない。(ただし、東北部出身者は、白菜、ネギ、大根、キュウリなどにみそをつけて生で食べる習慣があり、これが大好物という人は多い。)

南方出身者であれ東北部出身者であれ、私たちが、あつあつのご飯に“生”卵を落とし醤油をちょっとかけて食べるのがうまいと言うと、そんな気持ちの悪い食べ方！とよくびっくりされる。

ちなみに、「生」のものではないが、納豆も、彼らの苦手な食品の筆頭格である。マヨネーズやチーズも敬遠する人が多い。
- ◆ 帰国者は一様に日本のご飯はおいしい！水も良質である！と褒めてくれる。

(「食」ではないが、日本の水を使うようになって肌が滑らかになった、白くなった？、髪の毛の質がよくなった、髪が黒くなった？、髪が増えた？と言う人も。)
- ◆ 日本料理の煮物の味付けが苦手という帰国者は多い。酢の物もそうである。共通点は“甘さ”。甘くてしょっぱい、甘くて酸っぱいというのがだめなようである。
- ◆ 帰国者の大半は中国の東北部の出身である。東北部の料理は塩味を中心にした炒め物が多い。ネギや生姜、ニンニクなどで香味を出した油でいろいろな野菜を炒める。野菜と肉、野菜と卵といった組み合わせもこれに加わる。(山椒に似た香辛料である「花椒」や八角もよく使われる調味料である)。とにかく、彼らは野菜をしっかり摂る人々である。

確かに、高齢者の健康を考えると、塩分と油は控えめにした方がいいのだろう。しかし、「日本料理はヘルシー、中華料理は塩分が過多！油も使いすぎ」と、周囲の日本人が皆口々にそう言うので辟易しているという帰国者がいた。
- ◆ 中国の東北部は“粉もの(小麦粉)”文化圏である。餃子もそうだが、「饅頭(マントウ)」

や「花巻（はなまき）」※はその代表格だろう。餃子は特別な日の食べ物だが、饅頭や花巻は日常的に食されている。日本に帰国しても、饅頭や花巻を家庭で作って食べている帰国者は多い。

※餃子：日本の餃子とは異なり、皮がもちりと厚い。これを焼き餃子ではなく、ゆでて「水餃子」として食べることが一般的。

※饅頭・花巻：中に餡や具がはいっていない蒸しパンのようなもの。おかずとともに食べる（日本のご飯にあたる）。中に具が入っているものは「包子（パオズ）」といい、これも彼らの好物である。

デイサービス施設で、ある帰国者は、餃子や「饅頭」を作ってみんなにふるまい、たいへん喜ばれたとのこと。“講師”となって作り方を教え、みんなが「おいしい」と言ってくれる、それは、自分の持っている文化が認められたと感じることなのではないだろうか。

※中国帰国者が作成した [中国東北部の家庭料理レシピ](#) をダウンロードできます。

センターHP <http://www.sien-center.or.jp> からお入りください。

[トップページ](#) → [コンテンツガイド](#) C) 支援情報 → 4) 介護研修情報

→ * [中国家庭料理簡単レシピ](#)

(2) 「衣」について

- ◆ 中国の東北部は、冬は－30 度、－40 度にもなるところがある。暖房が効いている施設でも、長年の習慣から、冬はかなりの重ね着をしないと落ち着かないという人もいる。ズボンの重ね着というのもよく見かける。
- ◆ 寒冷で乾燥した地域では汗をかかないのでそれほど頻繁に洗濯する必要はない。日本は高温多湿ではあるが、そんなに頻繁に洗濯しなくてもいいのではないかとと思っている人が多い。

(3) 入浴について

- ◆ 洗濯と同様、皮脂を奪う洗髪は髪に悪いので、そんなに頻繁に髪を洗う必要はないと思っている人が多い。
- ◆ 中国の住居ではシャワーだけというのが普通である。湯船に浸かるという習慣のない人にとっては、広い湯船にゆったり浸かれるというのは魅力どころか面倒で苦痛なだけという人も少なからずいる。特に長時間浸かることが苦痛で、シャワーで簡単に済ませられたらと思っている人は多い。

大きな湯船を共同で利用するときのいろいろなルールもまた面倒を感じる人がいる。日本人にとっては子どもの頃からの“訓練”でルールという意識すらないのが普通であ

るが、帰国者にとってはそうではない。いちいち意識してルール違反・マナー違反にならないように注意しなければならない。

とはいえ、すっかり日本の入浴文化が気に入り、中国語がわかる仲間もスタッフもない施設でも、広い湯船に浸かれるのが楽しみで通っているという帰国者もいないわけではない。

- ◆ 異性のスタッフによる衣類の着脱介助や体を洗ってもらう介助への拒否感が強く、それで施設利用をやめてしまう帰国者がいる。特に女性はその傾向が強いが、男性にもそういう帰国者がいる。

また、帰国者の場合、入浴介助のスタッフが異性であることを、本人よりも配偶者が嫌って利用をやめさせてしまうことがあるとも聞く。

- ◆ 足湯は非常に喜ばれる。中国では、足湯は「洗脚礼」と呼ばれるいわば「親孝行」のシンボリック的儀式。洗面器にぬるま湯を注ぎ、丁寧に足を洗ってあげるとは、「あなたを親のように大事に思っていますよ」という気持ちを表すものと見なされている。

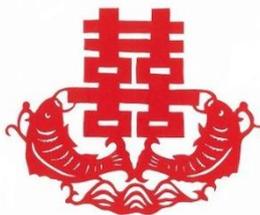
(4) 年中行事について

- ◆ 中国文化で一番大切な行事は何と言っても「春節」である。春節は日本の旧正月にあたる。(春節がいつになるかはインターネットで簡単に調べられます)。まさしく“盆と正月”を一緒にしたような家族の一大イベントであり、中国ではこの季節、帰省しようとする人々の「民族大移動」が行われることになる。

街中、また、各家庭のドアに、室内に、新たな1年の無事と幸福を祈るめでたい飾りが貼られる。春節の食べ物と言えば、中国の東北部は餃子。大晦日に当たる春節の前日には家族総出で餃子を作るのが習わしである。

※[中国の春節飾りは、センターHPからダウンロードできます。](#)

[トップページ](#) → [コンテンツガイド](#) C [支援情報](#) → [4\) 介護研修情報](#) → 「中国帰国者事情・中国文化事情」のコーナー



「倒福(ひっくり返った福)」は、「倒」と「到」の発音が同じことから、「福到(福が来る)」に通ずるおめでたい飾りとされている。

「双喜」も「喜」が二つというおめでたい意味がある。

- ◆ 中秋節もまた春節に次いで大切な行事である。(日本の「中秋の名月」はこの中国の伝統行事に由来するもの)。家庭の円満を祈り、一家団らんで食卓を囲み、月餅を食べる。月餅を贈り合う習慣がある中国では、この季節、スーパーや街頭に月餅があふれる。

3. 中国帰国者の／中国文化出身者の「介護」観

- ◆ 中国も近年は、一人っ子政策や、子どもが都市部に働きに出て老親だけで暮らす家庭が増えているなど、高齢者をとりまく環境は大きく変わってきているが、大半の帰国者家庭では伝統的な考え方が根強い。親の介護は子どもの義務であり、介護を人や制度に頼ることは子どものメンツにかかわると考える二世が多い。(日本で育った三世にもそういう考え方が受け継がれていることさえある)。
- ◆ デイサービスやショートステイを利用することや老人ホームなどの施設に入るということは自分が家族にとって“お荷物”になったということ、自分の面倒を見てくれる家族がいなかったということ、人に知られてしまうとの思いから、介護サービスを拒否する帰国者が少なくない。
- ◆ 「介護」というのは「寝たきり」の状態になって初めて受けるものだから、今はまだ不要だと思っている帰国者1世代が多い。「寝たきり」に至る前の段階で利用する介護保険サービスについて把握できていない、つまり受けたいサービスがイメージできないという帰国者も多い。

私たち中国帰国者定着促進センターが「中国帰国者」に接するようになって30年が経過しました。(平成26年3月現在)。センター開所の当初、すでに40代に入っていた「孤児」世代の平均年齢は現在71歳を超えています。私たちも、孤児世代が後期高齢者年齢に達する時代を見据えた新たな対応を迫られており、その中の最も重要なテーマがこの“介護”の問題です。終戦時の混乱を生き延び、戦後の中国での苦難と帰国後の日本での苦難、この2つの苦難を乗り越え高齢となった帰国者の方々に、少しでも「日本に帰ってきてよかった」と思ってもらいたい。そのための情報提供をこれからも心がけていきたいと思えます。

介護・福祉サービスに携わる皆さまへ

『中国帰国者事情・中国文化事情あれこれ』

平成29年8月版

作成：中国帰国者支援・交流センター(旧定着促進センター)

〒110-0015 東京都台東区東上野 1-2-13 新御徒町 7F

電話 03-5807-3173 (教務課)

メール info@sien-center.or.jp

ホームページ <http://www.sien-center.or.jp/>

-無断転載・複製を禁じます。ご利用の際にはご連絡ください。-